九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

突厥黙啜可汗の興亡と小高句麗国

日野, 開三郎

https://doi.org/10.15017/2344385

出版情報：史淵. 75, pp.21-49, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

突厥黙啜可汗の興亡と小高句麗国

日野開三郎

小高句麗国は突厥の復興とそれに刺戟せられて起つた契丹の叛乱に因る営州街道の梗塞、それに伴つて生じた唐の遼東維持の困難化、及びそれに乗じた震の建国等、目まぐるしく展開した東亜の複雑な国際的環境を背景に大唐の絶大な支援を受けて生れ出た国である。即ち此の国が生誕し得た所以は、右の三強国が遼東に於いて略々相均衡した勢力を有ち、特定一国の独占的支配が許されない状態に置かれたこと、換言すれば三勢力接会の緩衝地帯となつてゐたことに在る。又その建国は此の地の主住民たる高句麗人の自律的積極的活動に依るものでは無く、従来此の地方を領有してゐた大唐の強力な支援に負ふ受動的なものであつた。大唐の支援の意図は、此所に親唐的一国家を育成することに依り、突厥・震等の発展興隆が今後に齎す可き自国の国際的立場の不利化を出来得る限り防止挽回せんとするに在つた。即ち大唐は小高句麗が己の与国として成長することに期待をかけて建国の助成者たる労を取つたのである。然し乍らかくて生れ出た小高句麗が大唐の期待するままに無条件に動いて行くとは予測出来なかつた。一個の生命体として生れ出た以上、此の国自身の独自な利害を生ずるが、その利害が必ずしも常に唐の望む所と完全に一致し得るとは限らないからである。

小高句麗国が生誕してから安史の乱が勃発して東亜の形勢を一変せしめる迄の六十年近くの間（六九七―七五六）に於ける東北面の大勢を観るに、西の突厥は塞外制覇の大業を成就して大帝国に発展し、此れに対立する大唐も亦やがて玄宗

の中興時代に入り、東の震も国勢順調に伸張して新に渤海と称し、三国互に強盛を競ふの壯観を呈してゐた。小高句麗国は鼎立する此れら三大強国の勢力が相接触する緩衝地帯に拠る弱小国家として、その好むと好まざるとに拘り無く、その身辺に最大の圧力を及ぼす国家に対しその圧力の強さに応じた依附関係を結び、巧に離属依違して命脈を保つ外なく、国際場裏に強く自主性を打出して行く実力は無かつた。以下、かうした立場におかれた小高句麗国の対外関係に就いて考察する。順序として本章では先づ小高句麗国に生誕の機会を与へた突厥の默啜可汗の興亡と小高句麗国の動きとから取上げて行く。

第一節　默啜可汗の強盛と小高句麗国の服属

太宗に伐たれて一時沈衰した突厥が再び勢力を盛返し、調露元年（六七九）の頃から北辺に侵寇し、爾後、武韋の内訌に依つて大唐の対外活動力が鈍化したのに乗じ益々跳梁跋扈したことは先に述べた如くである。此の復興突厥の全盛時代を荷つたのは默啜可汗（Kapaghan Khaghan）と毗伽可汗（Bilgä Khaghan）とで、前者は長寿二年より開元四年迄（六九三―七一六）の二十三年間在位し、[注90] 後者は開元四年から二十一年迄（七一六―七三三）十七年間在位し、合せて四十年の長きに及んだ。両可汗の勢力には甲乙の差を認め難いが、後者の在世は恰も玄宗治世の前半に当り帝の中興政治が奏功してゐた時代であつた為め、その不羈奔放な活動を著しく牽制せられてゐたのに反し、前者の在世は相次ぐ女禍による唐の中衰時代に当つてゐたので、その武力を存分に揮つて四境を侵暴し、大唐をも圧倒してゐた。契丹の叛乱と営州の陥没（六九六）、震の建国と安東都護府の撤廃（六九八）、小高句麗の建国（六九九）等、大唐勢力の遼東・遼西よりの後退を示す大事件の連続発生は何れも默啜可汗の在位時代で、いはば彼の大唐圧迫の具体的な著例に外ならぬ。営州奪取の翌神功元年（六九七）、默啜可汗が唐を脅迫して穀種四万石・鉄四万斤・農器三千具・雑綵五万段に上る膨大な開拓資財

を供与せしめ、此れによつて一段と国威を加へたことは先に一言した。唐の勢力が後退した後ちの遼東・遼西の地が昇天の勢を示す黙啜可汗の支配に帰したであらうことは想像に難くない。

営州の域内に本拠を置く契丹の主力を煽誘して唐に叛かしめた黙啜可汗は、契丹が唐との対峙に全力を注ぎ他に備へる余力を失つたのに乗じ、狡猾にも背後より此れを脅迫して完全に屈服せしめ、かくて遼西の地を突厥の支配下に収めたが、その後も契丹及び奚は長く黙啜に制せられてゐた。通典巻一九六突厥伝に依れば、彼の勢力は「西は婆葛を繋滅し、東は神功以来契丹・奚を徴発し、その地、東西万余里、控弦四十万」と云はれる雄大なもので、奚・契丹は彼の駆使に甘んぜしめられてゐたのである。

黙啜可汗の勢力は遠く新建の震国にも及んで居た。大祚栄の大震建国にきつかけを与へた契丹の叛乱、営州街道の梗塞は、煎ずる所、黙啜可汗の強盛と云ふことに帰着する。つまり黙啜可汗の圧迫による大唐の遼東・遼西よりの後退が大震建国の外的因子であつた。而して大祚栄は建国に際して唐軍の追討を受け、同行の乞四比羽は討取られてゐる。かうした黙啜可汗の圧倒的優勢と大唐の大祚栄討伐方針とは、必然的に震国を突厥側に追ひやることとなつた。旧唐書巻一九九渤海靺鞨傳に

上略。聖暦中。自立爲振国王。遣使通于突厥。云云。

とあり、新唐書巻二一九渤海伝に

乃建國自號震國王。遣使交突厥。云云。

とあるは、大祚栄の黙啜可汗への接近を伝へた記事である。記述の内容が極めて簡略である為め、両者の結合関係を具体的に探り出すことが出来ないが、黙啜可汗の後を嗣いだ毗伽可汗の時代に於ける両者の関係内容から逆推するに、黙啜可汗の時代に於いてもその結合は相当緊密で、然も突厥側の宗主権が認められてゐたのではないかと思はれる。

黙啜可汗の勢力は震国以外の靺鞨諸族にも及んで居た。大震国、即ち後ちの渤海国を建て、又その支配層を構成したのは高句麗人と粟末・白山両靺鞨人とであつた。粟末・白山両靺鞨人は高句麗人と共に血族的に同系統の濊貊系通古斯族であり、又大高句麗時代に永らく協力して中国の進攻部隊と戦ひ共々に国運を支へて来たので、早くから親密な感情を以て融和してゐた。大祚栄が独立の旗上げを行ふや、彼等は忽ち傘下に集つて一体となり、震国より渤海国へと発展する中に融合して所謂渤海人を形成した。建国当初の震（渤海）国の領域が高句麗発祥の地と白山・粟末両靺鞨の住域、即ち伊通河との合流点附近より上流の松花江本支流域（粟末）と咸鏡南北道（白山）及び鴨緑江中上流域（高句麗）に限られてゐたことは先に一言した所であり、又後ちに詳論する予定であるが、建国初期の震国の領域がしばらく右の範囲に止まつてゐたのは、此の地域が同じ濊貊種の住地として忽ち糾合せられたのに対し、他の地域は純通古斯系の靺鞨諸族が占拠して大氏の主権を迎へなかつたからである。大氏に率ゐられて突厥に通じた震国とは未だ純通古斯系靺鞨諸族を併合し得ない前の濊貊系に限られた勢力である。震国の北境は、豆満江の下流域から間島の北部に至り、敦化地区を経て伊通・松花二水の合流点附近に出る一線に在り、[註91]その北方は領土外で、そこに純通古斯系の靺鞨諸族が拠つてゐた。その中で最強を誇つてゐたのは黒水靺鞨で、その住域は今の三姓（依蘭）以東の松花江最下流域一帯に跨つてゐた。[註92]黒水靺鞨の西に越喜、その西に鉄利、又その西に達姤（達姑・達盧古）の靺鞨諸族が住んでゐたと伝へられており、越喜靺鞨の住域は恐らく今の瑪顔河流域、鉄利靺鞨は阿勒楚喀河流域と推定せられ、達姤の住域は拉林・北流松花江二水の下流域と考へられる。[註93]尚別に瑚爾哈河流域以東日本海沿岸に至る広大な地域には拂涅靺鞨が居て、[註94]隋代以来その名を史に現はしてゐる。拂涅靺鞨の中、瑚爾哈河流域の者は此の時代に入ると虞婁靺鞨と呼ばれてゐる。[註95]達姤靺鞨のみは土着の純通古斯種たる伯咄靺鞨に室韋種の達姤部が侵入して出来た混血種ではないかと思はれるが、大体より云へばやはり純通古斯系の靺鞨と見て差支へないものである。達姤部の住域[註96]は隋代・唐初に著れた靺鞨七部の一たる伯咄靺鞨の住地で、その西南は伊通・松花二水

の合流点附近をその全住域の北端とする粟末靺鞨と接してゐた。[註97] 粟末靺鞨の住域は伊通・松花・輝発・東遼の諸水に跨り頗る広大であるが、輝発河流域・吉林附近と共にその三大中心地をなす扶余城（今の農安の西南）の地からは、東行して今の五常を経、寧安又は東京城に入り拂涅靺鞨の住地に至る街道があり、又東北行して鉄利靺鞨の中心阿城を経て三姓に入り黒水靺鞨に通ずる街道もあつて、此の二つの街道は北満を東西に横断する交通幹線として南北朝・隋唐遼金時代を通じ歴史に重きをなしてゐたことが知られる。[註98] 又扶余城の地からは西南行して営州（朝陽）に入り中国に出入する街道があり、[註99] 又西北行して突厥の牙庭に至る交通路もあつた。[註100] 別に突厥へは東流松花江・嫩江・洮児河を溯る交通路もあつた様であるが、[註101] 南北朝時代に於ける突厥勢力の満洲進出や、[註102] 契丹の渤海討滅戦の進軍路等[註103]から推して、遊牧勢力の北満浸潤は大体扶余城経由の上述街道を東進するのが通例であつたものの如く思はれ、従つて北満諸族の西北勢力への往来も此の街道に由つてゐたものと推測せられる。後ちに詳論する如く、旧唐書の渤海伝に依れば、黙啜可汗のあとを嗣いだ毗伽可汗は達姑・鉄利・越喜諸族の地を越えて遥か三姓以東の松花江下流域なる黒水靺鞨に突厥の監護官を派遣してゐたとあるが、かうした奥地への勢力浸透も先の街道に由つたものに相違なく、従つて扶余城の地を確保し、又達姑・鉄利・越喜の中間諸族をも服属せしめてゐたものと思はれる。毗伽可汗に勝る暴威を振つた黙啜可汗に就いては彼の純通古斯系靺鞨諸族に対する勢力の波及を伝へた記事が却つて見出されないのであるが、恐らくはやはり同じ街道に沿つて相当奥深く勢力を及ぼしてゐたに相違あるまい。

古来、塞外に覇を制した遊牧勢力は必ず満洲方面を制圧してゐる。南北朝時代に於ける突厥の東進、契丹の太祖阿保機の渤海討滅等はその適例であり、毗伽可汗の諸靺鞨服属も亦同様の例である。独り黙啜可汗のみ例外的に東方に無関心であつた筈はなく、現に震国に触手を伸ばしてゐたことが確められるのであるから、靺鞨諸族をも羈縻したと見る可きであらう。殊に黙啜可汗の衰亡過程に於ける靺鞨諸族の動きは強盛時の彼が靺鞨諸族を羈縻してゐたとの前提に立たなければ

理解し難いのである。資治通鑑巻二一二唐紀・開元二年正月の条に塞外の動きに就いて唐側が得た情報を伝へてゐるがその一部に

或言。靺鞨・奚・霫大欲降唐。止以不建営州。無依投。爲黙啜所侵擾。故且附之。云云。

とて黙啜可汗が契丹は勿論のこと、奚・霫・靺鞨の諸族をも悉く服属せしめてゐたことを記してゐる。靺鞨は初め高句麗人以外の在満通古斯系諸族を総称する名称としてのみ使用せられてゐたが、震国が出現して靺鞨諸族を代表する強大な勢力となり、更に名を渤海国と改めて他の靺鞨諸族に懸絶した発展を逐げると、靺鞨には従来の総名としての用法の外に、此の新興勢力たる震↓渤海を特定的に指す用法をも生ずることとなつた。[註104] 従つて右資治通鑑の記事に見える靺鞨も何れの用法に属してゐるかを検討する必要があるのであるが、只此の文面のみからは何れとも判定し難い。然し仮に此れが大震を指す特定的用法であつたとしても、靺鞨諸族の黙啜可汗への服属は、後半の形勢から逆推して殆んど紛れない事実であつたと考へられる。資治通鑑の右記事に見える靺鞨は恐らく震をも含めた靺鞨諸族を指し、さうした意味で旧来的な用法に属するものと思はれる。

以上の如く、契丹・奚・霫より更に震及び靺鞨諸族を服属せしめた黙啜が独り小高句麗を放置してゐたとは大勢的に考へられない所である。小高句麗としても亦弱小国家として保全の策を講ぜんとする以上、黙啜可汗の勢力東漸に対して超然たり得なかつた筈である。この様に考へて唐会要巻九五高句麗の項を見るに

聖暦二年。又授高蔵男徳武爲安東都督。以領本蕃。自是高句麗旧戸在安東者漸少。分投突厥及靺鞨等。云云。

とあり、旧唐書巻一九九高麗伝にも此れと同内容の記事があつて、高徳武が安東都督となつて後ち、即ち小高句麗が建国せられて後ち、高句麗人で突厥や靺鞨に投入する者の多かつたことを伝へてゐて、突厥と小高句麗との関係を考察する上に大きな手掛りを与へてゐる。新唐書巻二〇高句麗伝は此の分投を儀鳳二年の条に繋げてゐること、聖暦と儀鳳との何れの場合

に就いても、分投を事実として受容れることに支障を来さない大勢に在つたこと等は先に論述した如くであるが、分投が特に顕著となるに就いては先づ第一に遼東の高句麗人を境外に奔逃せしむ可き外部的誘惑が大きく存在してゐる必要があり、第二に奔逃を抑制して高句麗人を現住地に緊縛しておく現地統轄権力の弛緩が必要であり、東の震の建国や西の突厥の大唐を凌ぐ勢力の伸張は第一の外部的誘惑の条件に該当し、安東都護府による唐の遼東統治力の後退は第二の統轄権力弛緩の条件に該当するから、小高句麗建国の聖暦二年以後のこととして記されてゐる会要の分投記事は恐らく当時の実情を簡略乍らも正しく伝へてゐるものと見る可きであらう。即ち小高句麗国人は建国の直後より突厥に接近して行く傾向を示しつつあつたと考へられるのである。

さて一世に雄飛した默啜可汗も漸く老衰するに及び、管下諸部落に動揺を来し、逃散する者が次第に数を増して行つた。彼の衰亡に就いては次節に改めて論述するが、此の逃散に聯関して突厥と小高句麗との関係を示す重大な事実が伝へられてゐるので、取敢ず必要な部分を概観すると、開元二年（七一四）、默啜可汗の子の移沮可汗・同俄特勒や妹婿の火拔頡利発等を将とする突厥の北庭都護府攻囲軍が却つて同府の唐軍に打破られ、同俄特勒は擒殺せられるの醜態を演じた為め、さすがに強悍を誇つた默啜軍の威信も此れより俄に失墜した。殊に默啜可汗の峻厳な性格を知る攻囲戦参加の将兵達は、我が子の戦歿に怒り立つた可汗の敗戦に対する問責の苛酷なる可きを懼れ、火拔頡利発以下多数の者が相次いで戦列を離れ唐に来降した。かくて、默啜可汗の統御力は動揺し、此の年より翌開元三年にかけての唐への来降者は万余帳に達した。[註105] 来降者は突厥の外に種々の民族を含み、嘗ての默啜可汗の武威を偲ばせるに足るが、その中に高麗王高文簡なる者の一行が混つてゐて、小高句麗の研究に重要な資料を提供してゐるのである。高文簡来降の記事は多くの史籍に登載せられてゐるが、最も[註106]詳しい内容を盛つてゐるのは冊府元亀で、先づ同書巻九七七外臣部・降附門・開元三年二月の条に

突厥十姓部落左廂五咄之啜・右廂五怒失畢五侯斤。及高麗王・莫離支高文簡・都督跌思大等。各率其衆。自突厥相継

内属。前後二千餘帳。

とある。突厥十姓部落とは西突厥のことで、西突厥は十姓（十部）より成ってゐたのでかく呼ばれてゐた。十部は左廂五部と右廂五部とに分れ、左廂の五部は五咄陸部と号し、その長に五大啜を置き、右廂の五部は五弩失畢部と号し、その長に五大俟斤（イルキン）を置いてゐた。[註107] 従つて上文に見える五咄之啜とは五咄六（陸）の五大啜のことで、「之」は「六」の誤りであり、五怒失畢五俟斤は五弩失畢の五大俟斤のことで、「俟」は「俟」の誤りである。[註108] 突厥の内部構成に就いては省略し、此所に特に注意したいのは、東突厥の黙啜可汗に服事してゐた西突厥が、同じく此の可汗に臣事してゐた高麗王莫離支高文簡と行を共にして可汗に叛き唐に来降してゐることである。莫離支は大高句麗時代からの称号で、高文簡が小高句麗国王であることは先に述べた所である。西突厥と小高句麗国王とが相携へて唐に帰降したのは、黙啜可汗の老衰と敗戦後の混乱とに見切りをつけた寝返りであることは云ふ迄もないが、それにしても黙啜可汗の東隣の小高句麗国王の一党と、西側の西突厥とが行動を一にしてゐるのは注意すべきで、その大きな理由は、後述する如く、高文簡が西突厥の巨姓阿史那氏の女を娶つてゐたことに在る。尚同書（巻九七四）外臣部・褒異門・開元三年八月の条に依れば、此の時及び此の前後に唐に来降した者には西突厥・高麗等の外に吐谷渾の大首領慕容道奴や先掲吐蕃の大首領朕思大等の名が見え、又高麗王高文簡の一行中には小高句麗国の大首領高拱毅の名も見えており、高麗王は遼西郡王に、高拱毅は平城郡開国公に封ぜられたと云ふ。[註109] 更に同巻・同部門・同七年正月乙未の条に

封遼西郡王高文簡妻阿史那氏爲遼西郡夫人。文簡東蕃酋長。率衆歸我。故有是命。

とあつて小高句麗国王たる高文簡を東蕃酋長と云ひ、[註110] 彼が西突厥阿史那氏の女を妻としてゐたことを明かにしてゐる。唐会要（巻一〇〇）蕃夷雑録・聖暦三年三月六日の条の勅に「東至高麗國。南至眞臘国。云云。」とある如く、小高句麗は唐の東方の国とせられて居り、又旧唐書（巻一九九）高麗伝に「高徳武を安東都督として本蕃を領せしむ」とあつて高句麗人を明かに蕃とし

て扱つた例が見出されるから、小高句麗を東蕃と云ひ、国王を東蕃酋長と呼んだとしても不思議はない。寧ろ高句麗を東蕃と呼ぶ場合のあつたことを意に留めておく可きである。思ふに、小高句麗国王高文簡は女禍による唐の国威の不振、黙啜可汗の隆々たる発展と云ふ現実を見て唐を離れ突厥に一辺倒の臣服を捧げてゐたのであらう。それは弱小国家小高句麗に取つて唯一の保身策に外ならなかつたのである。所が黙啜可汗の老衰、殊に北庭都護府攻囲戟の敗北後に於ける衰落の甚しきを見、又唐が新進気鋭の明主玄宗の治下に著しく活力を取戻しつつあつた実情を眺め、此の形勢に対応す可く、姻戚関係に在つた西突厥等と相前後して唐に寝返つたわけである。此れ亦弱小高句麗の保身策に外ならなかつたのである。尤も此の寝返りには唐側から前以て誘引の手が打たれてゐたことも見逃せないのであるが、此のことに就いては後述する。

突厥・黙啜可汗の唐に対する優勢は神功元年、即ち小高句麗の建国よりも二年前に既に確立してゐた。穀種・農具・鉄・絹等を唐から喝取している事実は此の優勢の確立を立証する事件である。さすれば小高句麗の突厥への臣事は建国後間もなく決せられたと見る可きであらう。唐が親唐国家たらんことを期待して建てた此の国は未だ親唐国家としての大きな貢献をなすことなくして親突厥国家に転向せざるを得なかつたのである。然し高文簡が唐に帰降する直前の小高句麗は突厥一辺倒の立場を取つてゐたにしても、建国直後から同様の一辺倒であつたかどうかは明かでない。或は初め両属的な関係をとり、次いで一辺倒に転じたのかも知れない。冊府元亀巻九七〇外臣部・朝貢門・景龍四年（景雲元年）四月の条に「高麗遣使朝貢」とて小高句麗より唐への朝貢が行はれてゐるのは、此の朝貢の理由が明かでない為め確信をもつたことは云へないにしても、小高句麗の両属的外交を疑はしめる一資料である。又小高句麗の建国から高文簡が唐に帰降する迄の十六年間に、王座が唐朝の支援庇護を受けて建国した始祖の高徳武から高文簡に移つてゐることも、一応は小高句麗国の対外関係と結びつけて考へて見る必要がある。高徳武と高文簡との親縁関係や王座が徳武から文簡に移る迄の経緯等は

一切判らないが、文簡が突厥の女を妻として居た事実から推せば、突厥は唐の息のかかつてゐる徳武を全幅的に信用する気になれず、機を見て阿史那氏を妻はした文簡を国王の座に据えたのではないかと思はれる。景龍四年の小高句麗の唐朝への入貢はかうした默啜可汗の内政干渉に対する国内親唐派の一つの動きであつたのではあるまいか。勿論、以上の推想は歴史的証拠づけを得ない一片の推想として今後の補考を要するが、親唐国家たることを期待した唐朝の援助で生れ出た小高句麗が默啜可汗の強大な圧力の下に忽ち突厥に接近し、やがて一辺倒の臣服をしなければならなくなつたことは紛れない史実として認められる。先に紹介した唐会要の「分投突厥及靺鞨等」とある記事の「分投突厥」とは、建国後に於ける小高句麗国の突厥に対するかうした関係を簡略に伝へたものであらう。

唐代の突厥が遊牧民族であつたことは云ふ迄もない。然し突厥人が遊牧生活の民族であつたと云ふことは、直ちに突厥帝国が専ら遊牧経済に基盤を置いて立つてゐた国家であつたと云ふことにはならぬ。遊牧経済のみで大帝国を形成することは容易でなかつた筈である。農業民族や貿易幹線を内包するか、又は強力に支配してその経済力を取入れてこそ初めて大帝国への発展が可能的に考へられる。事実、突厥帝国が農業経済を内包し、且つその育成助長に努力してゐたことは、默啜可汗の唐に対する強請品が穀種・鉄製農具・鉄材等に集中し、且つそれが膨大な数量に上つてゐたことから容易に推察することが出来る。その農耕地域がどの方面で、従事者が何民族であつたかは研究を必要とするが、とにかく農業が突厥帝国内の相当重要な産業であつたことは紛れない。即ち帝国内に農地を少からず包有してゐたのである。従つて遼東の饒腴地に於いて農業を主生業としてゐた高句麗人が突厥帝国内に移住して全然生活が営めなかつたとは云へない。後年の例ではあるが、契丹の徙民政策によつて夥しい渤海人がシラムレン河方面の契丹本土に移され、そこで同じ移入漢人と共に農業に従ひ、契丹帝国の重要な財政的支柱となつてゐた事実は、突厥帝国の場合に於ける高句麗人移住の可能性を考へる上に有力な参考となるであらう。然しかうした遊牧民族が根拠とする地域には可耕地はあつても条件の優れた適農地は

少く、従つて遼東の沃地に住む小高句麗人が積極的に大規模移住を欲したとは思へない。後世契丹によつて強制的に西遷せられた渤海人も永く契丹の措置を怨み、隙さへあれば叛抗を試みてゐるのである。小高句麗国の突厥帝国への臣属関係が深まるに連れて政治的な関係で若干の投入者はあつたであらうが、大きな移動は無かつたであらう。投入は寧ろ同族系統で着々発展しつつあつた震国に向つて多かつたと解せられる。「分投突厥及靺鞨」は文字通りに解すれば小高句麗人が震国と突厥とに両つ乍ら投入したことになり、又かうした解釈を強ち誤りであるとも云へないのであるが、歴史的には「分投突厥」は政治的な国家の突厥への臣服、「分投靺鞨」は民族的な国民の震国への投入と解するのが最も事実に近いであらう。

以上を要するに、営州管内に拠る契丹人を煽誘して唐に叛かしめ、唐と遼東との交通幹線を遮断して唐朝の勢力を遼東から後退せしめた突厥の默啜可汗は、奚・契丹・霫等の遊牧民族を従へ、更に小高句麗国を臣服せしめ、国王に突厥の女を配して結合を固め、又震国を靡属入貢せしめ、尚その北方に分拠してゐた純通古斯系の靺鞨諸族をも羈縻し、かくて大唐に代り満洲全域に対する覇権を確立したのである。弱小国家小高句麗がかうした默啜可汗の東方進出に独り抗し得る筈なく、保身の為めには生みの親たる大唐を離れ、勢の赴くままに默啜可汗に服従せざるを得なかつた。開元三年に至り默啜可汗の衰微を見てとるや忽ち唐に復帰したのであるが、此の復帰の次第に就いては項を更めて考説することとする。

第二節　唐の玄宗の默啜可汗制誅と小高句麗国

突厥の復興、默啜可汗の暴虐極まりない跳梁は唐に取つて堪え難い大辺患であつた。保境安民・国威保持の為めには今や一日も早く突厥の勢力を撃砕する必要があつた。然し東西万里の地を支配する大突厥を一気に粉砕することが容易でないことは極めて明かであつた。東洋史上に繰返へされた所謂南北両勢力の対立に於いて、東の満鮮と西の中央亜細亜との諸民族は附随勢力たる役割を有ち、南北両勢力の優劣は何れが此の附随勢力を支配するかによつて常に大きく動かされて

ゐた。古くは秦漢と匈奴との対立が満鮮と西域との争奪なる形を以て展開し、此の争奪に敗れた側が劣勢に陥つており、近くは北朝隋唐と突厥との抗争がやはり同じ展開を辿つてゐる。北方勢力が東西の附随勢力を掌握した時、それはもはや中国側にとつて単に辺境を擾す程度の小脅威に止まるものではなく、中国側国家の存立を根本的に揺がす大脅威であつた。匈奴・突厥・契丹等皆その例である。かうした大勢を眺める時、默啜可汗の契丹・奚・霫・震・靺鞨及び小高句麗等満洲の全勢力に対する制覇の成就が、唐側に取つては絶対に放置し難い死活の大問題であつたことは自ら明かであらう。復興突厥の左臂に当る満洲の経略は突厥撃砕の最終目標と連る必遂の緊急課題としてその解決を唐に迫つてゐたのである。長安四年（七〇四）に於ける安東都護の復活は此の緊迫した要請に対して講ぜられた唐側の第一の措置である。復活後の初代都護に任ぜられたのは幽・営等州都督唐休璟で、兼任の形をとり、時は長安四年八月壬申[註111]であつた。時に営州は契丹に陥り突厥の支配に帰して居たのであるから、唐休璟の都督する営州とは幽州の漁陽県に僑治してゐたものに外ならぬ。営州（朝陽）を喪つた際の中国の東北経営の前面基地が幽州に置かれなければならぬことは歴史地理の明示する所で、満洲経営機関たる安東都護の復活が幽州を治所とする都督の兼任とせられた所以も此所に在つた。但し長安四年は所謂女禍の時代で、政治的な活力も頗るたるんで居た。幽州都督の兼任する都護の制はその後ちも引継がれ、景雲元年（七一〇）十月には幽州都督兼安東都護の薛訥が幽州経略節度大使となり、[註112]爾後節度使の都護兼任が通例となつてゐる。都護の復活から此の頃迄は都護の積極的活動が満洲に向けて活潑に展開せられた様子は見えない。蓋し政治のたるんだ女禍時代のこととて、東北経営の差迫つた必要の認識とそれに応ずる機関の設置とにも拘らず、実際の活潑な行動は展開すべくもなかつたのであらう。積極的な経略に乗出したのは玄宗の登場以後である。

玄宗が即位したのは先天元年八月で、此れより唐の対外活動は遽に活気を呈するのであるが、帝は景雲元年六月に韋后を誅滅し睿宗を復位せしめて以来、皇太子として既に実権を掌握しており、従つてその頃から早くも帝の積極性が凡ゆる

政策の上に反映しつつあつた。景雲元年十月、初めて幽州節度使を設置し、[註113] 此れに安東都護を兼任せしめたのは、玄宗の対東北政策の積極性を示す第一着手である。満洲方面の経営には、先に断隔せられた交通幹線の打通確保、即ち営州（朝陽）の恢復確保が絶対に必要であり、それには当面の奚・契丹の征服が必要であるが、当時の奚・契丹は突厥の黙啜可汗に服事し、且つ彼等自身が慓悍好武の民族で、此れが征圧には唐側に於いて強力な軍事力を整へておかなければならなかつた。又安東都護が満洲を経営するに当つても、今や突厥に帰服してゐた震・諸靺鞨・小高句麗を引きつけて行く為めには、やはり強大な武力の裏付けが必要であつた。玄宗が所謂十節度使の先頭を切つて先づ幽州に節度使を創置し、且つ此れに都護を兼任せしめたのは、上述の実情をよく認識して対満洲政策を実効的に推進せしめる基本態勢を施いたものと解せられる。又初代の幽州節度使として都護を兼任した薛訥は嘗ての遼東の統治に数々の功績を残した薛仁貴の子であり、彼自身も亦中廃前の安東都護府の最後の都護となつてゐた遼東通で、毛並も人物も傑出した名将として玄宗の中興政治をその東北政策の面に於いて分担するには最適任者であつた。節度使は万歳通天元年に勃発した契丹の叛乱以来此の方面に配置増強せられてゐた多数の軍団を統轄し、大軍の威力を最も効果的に活用せしめる為めに設けられた方面の最高軍司令官で、その権限が極めて強大なものであつたことは周知の如くである。但し此の節度使を愈々実際に動かして奚・契丹の経略に乗出したのは、玄宗が自ら帝位に即いた先天元年の頃からである。

大唐の満洲経営が営州街道の打通、従つて奚・契丹の制圧を必須とすることは、再三論述した如くである。玄宗は此所に着目して先づ奚・契丹の経略に手を着けた。即ち先天元年三月、久しく幽州に在り乍ら持重論を堅持して動かなかつた薛訥を河東に転任せしめ、北征論者の孫佺を此れに代へ、歩騎二万八千を将ゐて出征せしめた。然し奚の領袖李大輔の巧妙な作戦に引つかかつて冷陘山で殲滅的痛撃を被り悲惨な敗退に終つた。[註114] 彼我の消息に精通してゐた薛訥の自重論は恐らくかうした結果の生ぜんことを洞察してゐた為めに相違あるまい。然し乍ら玄宗は此の程度の失敗で挫折する者ではな

く、同時に又契丹強攻の愚を反覆する者でもなかつた。契丹との短期決戦を棄てて先づ満洲諸勢力を懐柔して前後より契丹を挾圧する漸進策に切換へた。かくて敗戦の翌先天二年（開元元年）春から満洲方面への働きかけが開始せられた。冊府元亀（巻九六四）外臣部・封冊門・先天二年二月の条に

是月封靺鞨大祚栄爲渤海郡王。

とあり、その原註に

上略。至是遣郎將崔忻。往冊命祚栄左饒衛員外大將軍・渤海郡王。仍以其所統爲忽汗州都督。

とあつて、震国王大祚栄に渤海郡王・忽汗州都督の爵官を授けてゐる。渤海靺鞨或は渤海国の名は此の爵名に因る。夷狄の君長に対する冊命封王は中国として最高級の親善意志表示である。時に孫佺が奚に大敗したあとであるから営州街道は未だ打通してゐなかつた。此の使行は山東の登州より遼東半島の都里鎮（旅順）を経て鴨緑江口に至り、同江を溯る水路に由つたものである。此の水路はやがて渤海の対唐交通の正路として「入貢道」と呼ばれる様になつた。有名な鴻臚井の碑は崔忻の水行を示す資料である。此の碑は使臣の鴻臚卿崔忻が井戸二口を掘鑿したことを記した碑で、旅順の黄金山の西麓に在つた。[115] 崔忻が使還したのは一年半近く後ちの翌開元二年七月である。[116] 一年半を費してゐるのは、彼の地に滞留して渤海を初めとする満洲の状勢を探察してゐたからに相違なく、又それが彼の使命の重要な一部であつたのであらう。冊府元亀（巻九七一）外臣部・朝貢門・開元元年（先天二年）十二月の条に

靺鞨渤海王子来朝。奏曰。臣請。就市交易。入寺禮拜。許之。

とある如く、崔忻使行のその年に早くも渤海側から王子を以てする使節団を唐に差遣してゐるのは、唐側の親善政策に応答したものであらう。渤海側がかくもたやすく唐朝に接近したのは、上文中の「就市交易。入寺礼拜」の句から察見せられる如く、唐の文化に限りない憧景を抱き、此れを出来るだけ輸入せんとし、又大唐文化の国内普及に必要な経済力の培

養を対唐貿易に求めんとした為めである。渤海はその建国に際して唐の圧迫妨碍を受けた怨みがある筈であるが、かうした強い欲求から建国の怨みを棄てて唐に親交を求めんとする空気が常に漲つてゐた。唐側でも渤海国内に於ける此の空気を早くから知つてゐたと見え、此れを唐の満洲政策に利用せんとする考へは夙く抱かれてゐた。旧唐書巻一九九渤海靺鞨伝に

中宗即位。遣侍御史張行岌。往招慰之。祚栄遣使入侍。将加冊立。會契丹與突厥連歳寇邊。使命不達。

とあつて武后が退けられ中宗が復位して大唐内の暗雲が去り光明の日ざしを感ずるや直ちに震国懐誘の使臣を送り、震国側も亦此れに応じて使臣を遣し、両者の結合将に深められんとしたこと、此の形勢を怒つた突厥が配下の契丹と盛んに唐を侵掠して牽制妨碍し、遂に結合を深め得ずして終つたこと等を伝へてゐるが、此れは突厥制圧の為めに左臂を断つ意味で満洲経営の必要なことを唐朝が熟知して居り、且つ震国が必ず懐誘に応ず可きことも洞察してゐた証拠と見ることが出来よう。突厥の必死の妨碍的侵暴と唐朝内に続いて起つた韋氏の女禍とによつて対満積極政策は中断せざるを得ないこととなり、結局、効果的な積極政策は玄宗の登場を俟たねばならなかつたのであるが、それにしても中宗の時の此の経験は玄宗の対震国積極活動に貴重な参考と自信とを与へたであらう。かくて玄宗の渤海誘引は一応の成功を収めたが、然し此の渤海の対唐接近は突厥を離れた一辺倒の接近では無かつた。黙啜可汗の渤海に対する羈縻はその被弑の開元四年迄続いてゐたのであるから、結局、渤海は突厥と唐とに両属の二元外交に依つたと見る可きである。

震国への遣使と時を同じうして、玄宗は小高句麗国にも懐誘の使臣を差遣した。冊府元亀巻九六四外臣部・封冊門・先天二年二月の條に

拝高麗大首領高定傅特進。

とあるのがそれを伝へた記事である。ここに云ふ高麗の大首領高定傅なる者が如何なる地位のものであつたかは明確にしがたい。小高句麗国を懐誘する為めの授爵の対象とせられた所より推せば、一般的には国王と解するのが通例であらう

が、此の場合には此の授爵の二年後たる開元三年の春に高麗王・莫支離と名乗る高文簡が突厥の羈絆から脱して唐に帰投してゐるから、軽々に高定傅を国王と断定す可きでない。国王高文簡は突厥の巨姓阿史那氏を妻としてゐたから、唐としては彼を直接懐誘することの容易ならざる可きを思ひ、先づ国王懐誘の前程工作として国内の大立物たる高定傅に授爵したのではあるまいか。若し然りとすれば、高定傅は小高句麗内でも国政の方向に大きな影響力を持つ屈指の勢力者であつたこととなる。彼を大首領と称してゐるのは彼が勢力者であつたことを証するものである。[註117] 尚同時代の大首領としては、国王高文簡が突厥を離れて唐に来降した時、此れに随行した者の中に「高麗大首領高拱毅」の名が見えており、大首領が大勢力者ではあつても必ずしも君主（最高首長）ではなかつたことを示してゐる。高拱毅や高定傅は共に小高句麗国内の最高権勢者で、高拱毅は高文簡が突厥に臣事してゐた時代に此の方針を支持して王と行動を共にしてゐた親突厥派であるのに対し、高定傅は国内の親唐派を代表する領袖であつたのであらう。小高句麗国の領域たる遼東の地は全満洲のうちで中国に最も近く、政治・経済・文化などすべて大唐の影響が最も大きく、又その建国に最大の役割を果した高句麗人は嘗て中国の本土に遷され、そこで約三十年間生活して送り返された者で、大唐生れの者も少くなかつた筈であるから、その建国から僅かに十年余りを経た此の時代に於いて小高句麗国内に親唐的な空気が強力に弥漫していたことは想像に難くない。冊府元亀巻九七〇外臣部・朝貢門・景龍四年（景雲元年＝七一〇）四月の条に「高麗遣使朝貢」とあつて、小高句麗国の入貢が伝へられてゐることは先に紹介した如くであり、又此の入貢の事情は明確にし難いが、折から黙啜可汗の強大な圧力がのしかかつてゐた事実より推して此の苦境を唐の援助に縋つて切抜けんとしたものではないかと推想せられることも既に論述した所である。何れにしても此の入貢が親唐的行動とは考へられこそすれ、反唐的行動とは絶対に考へられない。小高句麗の入貢を伝へた記事は唐史を通じて僅かに二三を計へるにすぎない程珍しいのであるが、それが先天二年に先つこと僅かに三年の景龍四年に見えてゐるのは、当時の国内に親唐的一派の勢力が強く存在してゐたことを推想する参考

となるであらう。思ふに、小高句麗国の内部には強大な突厥の黙啜可汗を懼れ、此れに恭順して保身第一の途を行かんとする現実的な一派の外に、建国以来の親唐派の流れを汲む者が居り、此の親唐派の大立者が高定傅であつたので、先天二年の唐側からの懐誘工作も先づ彼を交渉の対手としたのであらう。高定傅等の動きや彼を介しての唐の懐誘工作の反響等に就いては史に全く記されてゐないが、翌々年の国王高文簡の唐への来投には必ずや何らかの影響を与へてゐたであらう。小高句麗国王高文簡の突厥との通婚は、一見、此の国の外交を突厥一辺倒に徹せしめてゐたかの観を与へ、事実、表面に現れた外交政策はさうした形をとつてゐたのであるが、国内には親唐的な大きな底流があつて、内部的な勢力分野から見れば両属に近い情勢に在つたのである。

満洲に対する玄宗の働きかけは遠く震国北境外の彼方に在る純通古斯系の靺鞨諸族にも及ぼされてゐた様である。尤も此のことを書き伝へた記事はないが、冊府元亀（巻九七一）外臣部・朝貢門・開元二年二月の条に

拂涅靺鞨首領失異蒙。越喜大首領烏施可蒙。鐵利部落大首領闍許離等來朝。

とあるのは、右の推測を立てしめる有力な根拠である。広大な地域に分布する拂涅・越喜・鉄利等の遠北諸族の同行入貢は、唐が震・小高句麗等の懐誘に使臣を差遣して間もない時期であつた点から推して、やはり唐側の招撫工作があつてそれに応じたものと解せられなくは無い。彼等が入貢した開元二年二月は、唐が震・小高句麗の両国に使臣を発遣した先天二年（開元元年）二月から正に一年目であり、唐側の懐誘に応じた渤海の使節団が唐京に入つた開元元年十二月より後れること僅かに二箇月であつた。遠北の彼等の入貢が開元二年の春であつたとすれば、唐側の招誘は昨開元元年（先天二年）であつたに相違なく、結局、震・小高句麗と同時か、又はそれに引続いて行はれたと見る可きである。遠北の広大な地域に距り住する右の諸部族に対し唐側がどの様な方法を以て招誘の手を差伸べたかは究明すべくもないが、逐一唐から特使を仕立てたとも解し難く、寧ろ震若しくは小高句麗内の親唐派を利用しての工作であつたのではないかと思はれる。

此の工作方法に就いて想起す可きは、先天二年（開元元年）二月に震国に使行した崔忻の帰朝が開元二年七月で、実に一年半近くの後ちであり、彼が開元元年の二三月頃から翌二年の前半迄久しく震国に滞在してゐたと解せられることである。此の滞在期間に於いて彼は当然震国を中心とする満洲各地の情勢の探知につとめた筈であるが、更に推想をめぐらすならば、純通古斯系靺鞨諸族に唐朝側の招誘の意を伝へ、その入貢を促進したのも彼であつたのではないかと思はれる。その聯絡の方法として、随行の唐人を分遣したのか、親唐渤海人を使つたのか、或は震国に出入してゐた筈の諸靺鞨人と交渉したのか、さうした点は判らないが、滞在中の震国を足がかりにして招誘したものであることは殆んど疑ひあるまい。尚純通古斯系靺鞨諸族の入貢は、此の開元二年二月を皮切りとして開元末に至る迄頻繁に行はれてゐるのであるが、此れに就いて更めて考説する。

純通古斯系靺鞨諸族が默啜可汗の勢力に服属してその牙庭に入貢往来してゐたと解せられることは先に述べた如くである。彼等は開元二年以後新たに唐朝に入貢することとなつたが、それは決して默啜可汗と手を切つての一辺倒的な唐への服属を意味するものではない。彼等も震・小高句麗と同様、或はそれ以上に突厥の来侵に対し唐の助けを得難い立場に置かれてゐたのであるから、唐の招誘には応じつつも、突厥への臣属をも続ける二元外交に依らざるを得なかつたのである。

先天二年二月の使臣差遣に初まる玄宗の小高句麗・渤海・純通古斯系靺鞨諸族等の懐誘は彼等の唐朝への入貢を促すに至つた意味で確に効果をあげたと云ひ得る。然し彼等の入貢は決して唐への一辺倒の服属ではなく、何れも突厥に対する従来の服属関係をそのまま続け乍ら唐へも靡いて見せる二元外交であり、さうした意味で満洲に対する唐朝の勢力の浸透は限界の低いものであつた。默啜可汗の左臂に切りきずを与へた程度で、未だ切断には程遠いものであつた。唐朝の満洲に対する勢力を此れ以上強化する為めには営州街道の打通が必要であり、従つて奚・契丹の経略を進めなければならぬ。先天元年の征伐に惨敗して方針を改め、先づ満洲の諸勢力を誘引して契丹挾攻の態勢を張らんとした玄宗は、此所に一応

の成功を収めたものと見て、再び契丹征伐の断行に乗出した。資治通鑑巻二一二唐紀・開元二年正月の条に此の間のことを記して

初營州都督治柳城。以鎮撫奚・契丹。則天之世。都督趙文翽失政。奚・契丹陷之。是後寄治幽州東漁陽城。或言。靺鞨・奚・霫大欲降唐。止以不建營州。無依投。爲默啜所侵擾。故且附之。若唐復建營州。則相帥歸化矣。并州長史・和戎・大武等軍州節度大使薛訥信之。奏請擊契丹復置營州。上亦以冷陘之役欲討契丹。群臣姚崇等多諫。甲申。以訥同紫微黄門三品。將兵擊契丹。群臣乃不敢言。

とある。頗る長文であるが、言ふ所の要旨は

(1) 万歳通天元年の契丹の叛乱以来、營州（朝陽）は唐の領外となり、州は幽州の漁陽県に僑治してゐたこと。

(2) 靺鞨や奚・霫等は唐への帰服を大いに欲してゐるが、唐が營州（朝陽）を喪つたままにしてゐるので、依投す可き術がなく、止むなく突厥の默啜可汗に附したままでゐるとの牒報を得たこと。

(3) 玄宗は此の牒報を得て、冷陘山に於ける先の敗北の雪辱をもかねて再び契丹を征伐し、營州を復置せんと決意したこと。

(4) 先の契丹征伐に反対して并州（太原）節度使に遷されてゐた東北通の薛訥も此の牒報を信じ、契丹を征し營州を復置することに讃成し、その役を買つて出たこと。

(5) 群議は反対であつたが、玄宗は薛訥をして此の大役を遂行せしめることとしたこと。

等の諸点に帰着する。靺鞨や奚・霫等が唐に心を寄せつつあつたとの牒報が唐に入つたのは、契丹再征が決せられた開元二年正月より以前であり、又第一回の征伐が失敗した先天元年三月以後でなければならぬから、大体先天二年＝開元元年中と見る可きであらう。彼の崔忻が震国に滞在して此の方面の情報蒐集や諸勢力の懐誘に活躍してゐたのは開元元年二月

以後翌二年七月の頃迄であるから、右の牒報も恐らく主として崔忻等の使節団から唐に送られたものであらう。そして震国や靺鞨諸族が唐の懐誘に応じて遥々入貢してゐる事実から推すに、靺鞨・奚・霫等が唐に心を寄せてゐたと云ふのも決して虚報ではなく、崔忻等の活躍と相俟つて、唐側で相当期待し得る事実であつたと云へよう。東北通の薛訥が此の牒報を信じたのも当然であらう。即ち開元二年の初め頃には默啜可汗配下の諸部諸族には離心の兆が窺はれつつあつたのである。薛訥は先天元年初めの契丹北征には持重論をとつて譲らず、遂に幽州節度使を逐はれ、太原の節度使に遷された。此のことは先天元年の初めに於いては未だ默啜可汗の所部に対する統御が堅固で、北征に成功の見込みが無かつたことを意味する。それが今や北征の大役を買つて出で、群議の反対を押さへて断乎決行を主張したのは、先の敗戦から僅かに二年の間に、唐の満洲諸勢力への働きかけが一応成功し、恐らくそれを一因とする默啜可汗の支配に箍の弛みを来したので、北征の機は正に熟せりと見たからであらう。薛訥の默啜可汗の勢力に対する此の見通しは確に狂ひが無かつた。默啜可汗の勢力は此の直後に大音響を立てて崩壊するのである。

小高句麗・震・靺鞨諸族の懐誘、奚・霫等の寄心を計算に入れての唐の契丹北征計画は、此れを突厥の默啜可汗の側から見れば、彼に取つて由々しい結果を齎す可き一大反攻態勢の形成として映じたであらう。事態は今や放任出来ない差迫つた段階に在る。此の形勢に対して取つた彼の対策は、その慓悍な武力を以て辺境に於ける唐の要地を攻陥侵略して唐側を震憾せしめると共に、その所部の諸族諸勢力にも唐の力の頼むに足らざるを思ひ知らす方法であつた。先に唐の中宗が震国との提携を推進せんとした時、默啜可汗は此の辺境侵暴作戦を以て唐の反攻をあきらめしめることに成功した体験を有してゐた。かくて可汗が攻略の目標として選んだのが北庭都護府で、その子の同俄特勒、妹婿の火拔頡利発、及び石阿失畢等を将とする精鋭を送つて都護府を囲ましめたが、開元二年二月、却つて都護の郭虔瓘に破られ、同俄特勒は殺され、その責めの身に及ばんことを懼れた火拔頡利発[註118]等はそのまま妻子を率ゐて唐に奔投した。[註119] 此の敗戦は所部を引締めんとし

た黙啜可汗の失敗を意味し、此れより彼の勢力は大きく動揺し急速に崩壊して行つた。殊に敗戦と同時に契丹の有力な酋長が唐に帰投したのは爾後の形勢に大きな影響を与へた。新唐書巻二一九契丹伝に

開元二年。盡忠従父弟都督（李）失活。以黙啜政衰。率部落。與頡利發伊健啜來歸。

とあるはその帰投を伝へた記事である。[120] 但し来投の月日は記されてゐない。然し同俄特勒を喪つた責めを恐れ、敗戦後は黙啜可汗の許に帰らず、火拔頡利発と同様、そのまま唐に奔投した石阿失畢の記事を、資治通鑑は同年閏二月の条に繋けてゐるから、頡利発火拔や李失活等の来帰もやはり此の頃のことではないかと思はれる。但し李失活の来降は契丹の挙族来降を意味するものではなかつた。彼が李尽忠の一門として有力な酋長であつたことは疑ひないが、尚その外に未降の相当有力な勢力が残り、それが尚唐朝の営州独占を妨げでゐた様である。と云ふのは、同年七月、薛訥が六万の大兵を率ゐて契丹を討つてゐるからである。彼は檀州を出でて契丹を伐つたが、伏兵の為めに大敗し、漸く身を以て免れ、一切の官爵を削られ僅かに死罪を赦されると云ふひどい結果に終つた。かくて営州の完全恢復は成らなかつたが、とにかく契丹の有力酋長が来降し、大きな親唐派を生じたことは唐に取つて非常な収穫であつた。李失活等来投契丹人の根拠地は明示せられてゐないが、その酋長が李尽忠の族裔であつた点から推して、恐らく営州（朝陽）の附近であつたと想はれる。武力征服は二度とも失敗したとは云へ、かうした契丹の有力酋長の来投は営州方面に対する唐の勢力を益し、将来の占有に大きな手掛りを得たわけである。更に仔細に検討するに、李失活の帰投を機として漸く満華を結ぶ交通幹線としての遼西が或る程度現実に利用せられ初めた様である。

久しく入貢を絶つてゐた純通古斯系靺鞨の拂涅・越喜・鉄利等の諸族が開元二年二月に遥々奥満洲から朝貢して来たこと、それが開元元年二月以来震国に使行滞在してゐた崔忻等の招誘に応じたものであらうこと等は先に論述した所であるが、その経由した道順を考へるに、瑚爾喀河を溯つて敦化地方に出で、輝発河を溯り（以上震国領）、渾河の流域を下り、

新城州・遼城州を過ぎ（以上小高句麗国領）、遼西（唐の故の営州の地、契丹の勢力範囲内）を経て中国に入つたものと解せられる。その考証は複雑で、更めて扱ふ外ないが、震・小高句麗両国の中心部を貫き更に契丹の翼下を通過するもので、此れら三者の諒解なしには往来出来なかつた。震国は既に開元元年十二月に王子を朝貢せしめて親唐の実を示しており、小高句麗国も亦高定傅等の親唐一派が動いてゐたので、同じく親唐靺鞨諸族の入貢使臣に国内通過を許したことは不思議でなく、同様に営州管内を通り得たのも契丹の諒解があつたからに相違なく、その諒解を与へ往来の安全を保証した者こそ李失活であつたのであらう。李失活の降唐は開元二年閏二月には既に終つてゐたことが推定せられるが、二月には少くとも態度を親唐的に改めてゐたのであらう。崔忻に促されて入唐の期を窺つて居た靺鞨諸族は、李失活の附唐によつて全行程が打通せられるや直ちに中国に入つたものと思はれる。かくの如く李失活の附唐によつて遼西の街道が利用可能となつた以上、満華の交通は便利となり、唐の対満勢力が大きく伸張す可きは極めて明かである。然し利用が可能になつたとは云へ、未だ安全性に缺ける所があつた。突厥を背景とする未降の契丹勢力が残つてゐたからである。そして此の安全性の強化を覘つたのが薛訥の契丹征伐で、それは大敗に終つた為め、営州の確保は武力決戦以外の方法で達成しなければならなかつた。

新唐書巻六六方鎮表・幽州の欄に依れば、幽州節度使の創設を開元二年に置き（此れは誤りであること先述）[註121]且つその管下に営平鎮守使を設け、平州に治したことを伝へてゐる。[註122]又安東都護府が幽州から平州に徙されたのも此の年である。従つて営平鎮守使の設置は幽州節度使の会府として大兵の屯駐してゐた幽州から平州に進出した都護府を衛る為めの有力な兵団[註123]の新設であつた解せられる。遼東経営の最高機関として生れ出で、必ず高句麗・靺鞨と結びついて来た安東都護府の幽州から平州への進出も亦必ずや小高句麗・靺鞨の動きと関係あるものに相違あるまい。思ふに、開元二年二月の李失活の附唐による遼西街道の打通は、既に親唐を表明しつつあつた震・小高句麗・靺鞨諸族等の盛んな入貢を促すに至る可き

ことを予想せしめ、従つてそれに対処す可き必要も生れ、それが都護府を平州に進出せしめた一要因であらう。都護府が平州に治所をおいたのは、満洲諸勢力の入唐使臣が此の地に入つてゐたからに相違なく、このことから延いては遼西に於ける彼等の通路にも手掛りが得られるのであるが、此れ亦別に論ずることとする。

唐の対満勢力を一層拡大浸透させる為めに必要な遼西路の安全度強化、営州の完全奪還は李失活の附唐によつて俄かに有利となつた。勢に乗じた唐の武力進撃は失敗したが、李失活の附唐は依然として希望を繋ぐに足り、唐として是非とも実現を期さなければならなかつた。大兵団を伴つた都護府の平州進出はかかる営州恢復への段階としての意味を第二の要因に含んでゐたと解せられる。即ち北庭都護府の敗戦以来、動揺を続ける黙啜可汗の所部を遥かに睨んで彼等に親唐政策への転換を呼びかけ、来投受理の態勢成れるを示す意味を併せ有してゐたものと思はれる。事実、来投は続々と相次いだ。開元三年二月、突厥に通婚してゐた小高句麗国王高文簡が所部の大首領高拱毅等を従へ、姻戚の西突厥十姓部落や吐谷渾等と共に大挙来投したことは先に述べた如くである。かうした所部の相次ぐ離散に威信地に墜ちた黙啜可汗は、開元四年六月、部下の抜曳固に斬られ、その首は長安に送られた。[註124] 塞外を制覇して一時は大唐をも圧倒し、久しく威暴を逞しくしてゐた黙啜可汗の被弑が亜細亜の形勢に大きな変化を与へたことは勿論で、殊に東北面は大きな影響を受けた。先づ第一は、新唐書巻二一九契丹伝に、開元二年の記事を承けて

後二年（開元四年）。與奚長李大輔皆来。云云。

とある如く、開元二年の李失活の帰唐に同調しなかつた契丹の残存勢力が奚の総帥李大輔と共に唐に来投した。開元五年、唐は李失活・李大輔等契丹・奚の総帥にそれぞれ公主を妻はして優遇し懐撫につとめた。かくて同年には営州の完全恢復がなり、次いで七年、営州治には平盧軍節度使府が置かれ、安東都護府も平州より営州管内の要地燕郡（義県）に徙されたこと、先に論述した如くである。此の営州の復興確保により遼西の満華交通幹線は唐に確保せられ、唐の対満勢力

は飛躍的に強化せられた。渤海や靺鞨諸族の入唐は此れより頻繁を加へて行くのであるが、その詳細は後述する。小高句麗国が全く唐の羈縻下に置かれたことは云ふ迄もあるまい。小高句麗王高文簡の降唐は開元三年二月、遼西郡王の受爵は同年八月で、何れも営州収復前であるが、彼の妻阿史那氏が遼西郡夫人の栄爵を受けたのは開元七年正月で、営州収復の二年後である。従つて夫人への授爵は默啜可汗死し営州の収復が成つて後ちの小高句麗と唐との親善結合の強化を示す唐側の処置と見ることが出来る。かうした唐側の授爵、即ち親寵の最高表示に対し、小高句麗側が答示す可き親善の最高表示たる遣使朝貢の記事は意外にも伝へられてゐない。その所以に就いては詳考しなければならぬが、それに聯関して、冊府元亀巻九七九外臣部・褒異門・開元四年閏十二月の条に

東蕃・遠蕃靺鞨部落・（拂）涅部落・勃律國。皆遣大首領来朝。並賜物三十段。放還蕃。

とある[125]東蕃に就いて一言しておかねばならぬ。此の場合の東蕃は遠蕃靺鞨・拂涅靺鞨等と並立せられてゐるから、単に東方の蕃部と云ふ漠然とした広い用法でなく、限定せられた或る部族を指したものと解す可きである。遠蕃靺鞨に就いては同書巻九七五外臣部・褒異門・開元十九年二月癸卯の条にも

遠蕃靺鞨遣使賀正。授將軍放還蕃。

と見え、当時盛んに入貢してゐた拂涅・越喜・鉄利・黒水等の諸靺鞨と区別せられた別のものを指してゐる。その正体は判らないが、拂涅・越喜・鉄利・黒水等の常貢諸靺鞨とは別派の稀にしか入貢しなかつた遠隔の靺鞨であらう。かうした遠蕃靺鞨や拂涅靺鞨と並立せられた東蕃の実体として考へられるのは、先づ第一に小高句麗国である。唐が小高句麗を東方に位置する国として扱ひ、又此の国民を蕃或は東蕃と称した実例もあることは先に述べた如くである。勿論、語義的に東蕃と呼び得るものは多いから、小高句麗が東蕃と呼ばれてゐたとしても、逆に東蕃が小高句麗であつたとは必ずしも確言出来ない。或は他の勢力を指してゐるのかも知れないが、仮に此れが小高句麗国であつたとしても、東蕃入貢の記事

は、管見の限り、開元・天宝四十余年を通じて此の一回に止まり、更に高麗入貢の記事に至つては全く見出されないのであるから、結局、小高句麗の対唐親善関係を標示する入貢の所伝は皆無、又はそれに近いこととなる、同期間の渤海の入貢記事が約五十回、拂涅靺鞨が十七回、黒水・鉄利・越喜の諸靺鞨がそれぞれ十六回・十四回・十回も検出せられるのに対比し、[註126]余りにも対蹠的である。靺鞨諸族や渤海よりも唐土に近在し、政治的にも一層強力な羈縻を受けてゐた筈の小高句麗が独り此の様に朝貢を怠つてゐた筈はない、然るに入貢記事の所伝がないのは、そこにそれとしての理由があつたと見なければならぬ、そして此の理由を説明するものこそは安東都護府の職掌である。

安東都護府は大高句麗の故地遺民を直轄統治する唐の現地最高機関として設置せられたもので、その必要から靺鞨等の接住民族の動静をも監察してゐた。但し最高統治機関としての安東都護府は聖暦元年の廃止で終りを告げ、復置後の安東都護府は只側面から満洲の勢力を羈縻するに止まつてゐた。然し創置当初の安東都護府と高句麗遺民との此の統治・被統治の関係は復置後の安東都護府と小高句麗との関係に伝統的な影響を残し、唐は小高句麗国を安東都護府の所管として関係政務を府に委任してゐた様である、旧唐書巻三九地理志・河北道・安東都護府の項に、開元年間の小高句麗国内十四州を安東都護府の羈縻州として記し、新唐書巻四三地理志・羈縻州・河北道の項には天宝年間の小高句麗国内二十三州を安東都督府の所管と明記して暗に安東都護府の所管たることを示して居て、開元・天宝年間の小高句麗国内諸州が唐の安東都護府の所管に属する唐の羈縻州たるたてまえであつたことを察知せしめる。復置後の安東都護府が幽州から平州を経て燕郡へ（開元七年）、更に遼西故郡城へ（天宝二年）と、唐の満洲への勢力浸潤に伴つて次第に小高句麗国に近い位置に進出してゐるのは、安東都護府と小高句麗とのかうした特殊関係に因る所が多かつたと思はれる。小高句麗国王の使節及び国内諸州の大首領等の入貢は専ら安東都護府で処理せられ、直接中央で扱はれず、その為めにその入貢記事が中央の記録に留められないで今日に所伝を残さなかつたのであらう。渤海や靺鞨諸族に対しても安東都護府の督察は充分加へられ、彼

等の処理に対する都護の意見は中央でも頗る重んぜられてゐたが、[註127] 都護府の羈縻統轄に全任せられないで、その入貢は中央で取扱はれ、よつて入貢記事を多く保存したものと思はれる。小高句麗の唐に対する隷属的朝貢は、その所伝の有無に拘らず、渤海・靺鞨諸族に比して格段の頻繁さを以て行はれてゐたに相違なく、かく解しなければ開元七年の小高句麗国王妃に対する授爵は理解し難くなる。

以上、默啜可汗の興亡と小高句麗国の動きとに就いて考察した所を要約すると、默啜可汗の興隆に圧されて営州を喪ひ、止むなく遼東より後退せざるを得なくなつた唐が、その親唐的発展を期待して遼東に建てしめたのが小高句麗国であるが、建国後の小高句麗は折柄の女禍に国威不振の唐を去つて圧力の強い默啜可汗に附し、同様に震国や靺鞨諸族も突厥に服事したので、唐と突厥との対立は明かに唐側の劣勢となり、中興政治に邁進した玄宗をして執権と同時に頽勢の挽回を急がしめた。玄宗は即位直後より強力に満洲政策を推進し、小高句麗・震・靺鞨諸族を招誘し、契丹を経略して営州街道の打通をはかり、默啜可汗の衰退被弑に乗じて遂に営州を完全に恢復し、小高句麗はもとより、渤海・靺鞨諸族に対する唐の羈縻を強化したのである。此れを小高句麗国側から云へば、默啜可汗の隆昌時代には彼れに附し、玄宗代つて制覇すれば此れに転附し、又両々対峙して勝敗不明の時代は双方に分属し、両強の間を依違去来することによつて身を保つてゐたこととなる。尚默啜可汗の死後、一時活力を喪つた突厥は、嗣立した毗伽可汗の下に忽ち往時の隆昌を取戻したので、小高句麗を初めとする満洲諸勢力の唐朝への専属による保身は許されず、依然として両属政策が続くのであるが、此れに就いては章節を更めて論究することとする。

註

90　平凡社の世界歴史大系第五、「東洋中世史第二篇」の中の第四篇・第一章「隋唐時代のトルコ諸部族」中に述べられた松田壽男氏の説に従つた。唐會要巻九四突厥の項には毘伽可汗の死を翌二十二年四月としてゐる。

91　史淵三六・七合輯號所載の拙稿「靺鞨七部の住域に就いて」参照。

92 黒水靺鞨の住域に就いては、池内博士著「滿鮮史研究中世第一」所載の「鐵利考」による。

93 鐵利の住地に就いては諸説紛紛たる状態であるが、註92の池内説が最も妥当性に富んでゐると思はれるので、それによつた。越喜靺鞨に就いても諸説があるが、私見はそれらとも異つたもので、私見の大様は帝國學士院記事二巻三號所載の拙稿「後渤海の建國」参照。又達姤に就いては別に考説したい所存である。

94 拂涅靺鞨の住域に就いても學説が多い。私見はそれらと可成り違つたもので、詳しくは前出の拙稿「靺鞨七部の住域に就いて」参照。

95 但し虞婁に就いての私見は未熟である。更に詳考したい所存である。

96 達姤部は契丹時代に達盧古部等と記され、その住域が拉林・北流松花最下流域の間に在つたことは、史淵自二九輯至三三輯連載の拙稿「兀惹部の発展」中に於いて「兀惹部の達盧古部制圧」に聯関して、先輩の高見によりつつ考説してゐる。

97 伯咄・粟末両靺鞨に就いても前出の「靺鞨七部の住域に就いて」参照。

98 此の街道に就いても註97の論文参照。

99 註98に同じ。

100 史淵三五輯所載の拙稿「勿吉考」及び四一乃至四三輯所載の拙稿粟末靺鞨の対外関係」参照。

101 前出「勿吉考」参照。

103 102 註101に同じ。此の進軍路に就いては未発表の別稿「東丹國考」に於いて考説しており、又史淵四九乃至五一輯所載の拙稿「渤海の扶余府と契丹の龍州黄龍府」の中にも多少触れてゐる。

104 此のことは前章に若干例を示して説明した所である。

105 以上、突厥の動揺は通典巻一九八邊防典・突厥の項による。

106 新唐書巻二一五突厥傳、通典巻一九八邊防典・突厥の項等は本文に引用しない主な所傳である。

107 唐會要巻九四西突厥・貞観十三年の項による。

108 前章の註66と照合せられたい。

109 原文の一節は前章第一節に引用。尚同記事は同書巻九六四外臣部・封冊門にも見えてゐる。

110 此のことも亦前章第一節に言及した所である。

111 資治通鑑巻二〇七及び旧唐書巻九三唐休璟傳等による。特に月日は前者に依つた。

112 資治通鑑巻二一〇同年月の条、旧唐書巻九三薛訥傳等に拠る。

113 節度使の出現年次に就いては種々の説があり、幽州節度使の創置年代は、此の節度使一般の起原年代と聯關する頗る重要な問題であるが、今尚結論を得てゐない様である。新唐書巻六方鎮表・幽州の欄は開元二年を以て創置の年なりとし、呉廷燮氏の歴代方鎮年表中の唐方鎮年表巻四幽州の項には、燕公集を引いて、先天二年、即ち開元元年を以て創置の年としてゐる。新唐書の方鎮表は、開元元年には幽州防禦大使を置

いたことのみ記し、節度使の設置は翌二年の欄に入れてゐる。唐會要巻七八節度使の項には先天二年二月としてゐる。新唐書の方鎮表は恐らく此れに從つたのであらう。此の様に此れらの諸書は或は開元元年（先天二年）とし、或は二年とし乍ら、その初代の節度使を甄道一とすることに於いて何れも一致してゐる。所が資治通鑑巻二一〇景雲元年十月丁酉の条には、その年月日を以て幽州節度使創置の時なりとし、考異に於いて、此の説を採つた所以を述べてゐる。それによれば資治通鑑の記事は太上皇實録によつたものであると云ふ。又景雲二年四月、賀拔延秀なる者を以て河西節度使に任じたのが節度使の最初であると云ふ通説をも否定して、景雲元年の幽州節度使こそ最初の節度使であると論じてゐる。因みに、故岩佐精一郎氏の遺稿に「節度使の起原に就いて」の一篇があり、節度使の起原に関する卓見が示されてゐる。

114 前出の松井等氏「契丹勃興史」による。

115 碑の文面には

勅持節宣労靺鞨使鴻臚卿崔忻鑿井両口。永為記験。開元二年五月十八日造。

とあると云ふ。右の靺鞨とは震（渤海）国のことである。崔忻は先天二年（開元元年）二月に命を受けて出發し、使還したのは翌開元二年七月であつた。從つて開元二年五月十八日造」とある此の碑は帰路に建てられたものではあるまいか。彼の滞満中は本國との聯絡が保たれてゐたであらうし、又彼の使命は成功裏に達成せられて今後の彼我往来の盛んなる可きことも予測せられ、さうした經験や予測の下に此の要地に井戸を造つたのであらう。

渤海國志長編巻三による。

116 前章に於いて高定傳を小高句麗國内の一権臣と見ておいたのは、かうした推測の上に立つ。

117 火拔頡利發は通典巻一八九邊防典・突厥の項には大拔とある。頡利發(Iltäbär)は突厥の官名で、頡吐發とも音写せられてゐる。満蒙史論叢第四所載、小野川秀美學士「突厥碑文訳註」の「註144」には、旧唐書巻一九四西突厥・統葉護可汗傳に「其西域諸國王悉授頡利發。云云」とあるを引いて頡利發の説明とせられてゐる。西域諸国の王に與へてゐたものとすれば、明かに相當の榮官で、可汗の妹夫が此の官を帯してゐたのも肯ける。

118 以上、通典巻一一九八邊防典・突厥の項、資治通鑑巻二〇五等による。

119 唐會要巻九六契丹の項にも同記事あり。

120 註113参照。尚幽州節度使創置の年次が景雲元年であることを明かにしてゐる資治通鑑にさへ、一見、此の節度使設置の年次を誤解せしめるが如き記事が載せられてゐる。即ち巻二一一の開元二年末の条に

121 是歳置幽州節度・經略・鎮守大使。領幽・易・平・檀・嬀・燕六州。

とあるのがそれである。然し此の記事は經略使・鎮守使を兼ねる幽州節度使の出現を伝へたもので、節度使そのものは景

雲元年に既に出現してゐたのである。景雲元年の節度使は經略使を兼ねてゐたが、鎮守使は兼ねてゐない。開元二年は平州に營平鎮守使が置かれた年である。幽州節度使が開元二年に鎮守使をも帯したのは、此の營平鎮守使の設置によるものであらう。資治通鑑の開元二年の記事は、新に鎮守使をも兼任する幽州節度使の設置を記したものであるが、かうした事情を知らずに此の記事を讀めば、幽州節度使の設置が此の年なるかの印象を受けざるを得ない。幽州節度使に就いては夙くよりかうした紛はしい所傳があつて、それが設置年代に就いての諸説を生む一因となつたのであらう。

122 原文には太平州とあるが、幽州藩の管下六州に太平州は無いから、此れは平州の誤りであらう。尚表の撰者は此の營平鎮守使を以て後ちの平盧軍節度使の先駆と考へてゐる様である。

123 鎮守は軍・城・守捉と共に所謂軍鎮の一をなし、然も夙くから都護府の護衛軍團として現れたもので、萬を越すものも少くなく、小なる鎮守でも概ね數千を計へてゐた。

124 唐會要巻九四北突厥の項。通典巻一九八邊防典・突厥の項等による。

125 同書巻九七外臣部・朝貢門に同記事あり。

126 此れらの入貢回數は次章に述べる。

127 このことに就いては次章に黒水問題を中心として例示する。

Rise and Fall of the Reign of *Kapaghan* of Türküt and *Small Kao-kou-li*(小高句麗)

By K. Hino

The reign of *Kapaghan Khaghan* (默啜可汗 ; 693-716 A.D.) was at the heyday of *Türküt* (突厥), which oppressed the T'ang

Dynasty and intercepted the land transportation between T'ang (唐) and *Liao-tung* (遼東) province by capturing the *Ying-chou* (営州). Being compelled to withdraw from *Liao-tung* by that interception, T'ang let the native people of *Kao-kou-li* (高勾麗) establish their own state, intimate to her. That was the establishment of the *Small Kao-kou-li* (699 A. D.). In spite of her establishment by the support of T'ang, *Small Kao-kou-li* yieleded to *Kapaghan Khagan* under the pressure of this power and the King married a woman of the *A-shih-na* gens (阿史那氏), a powerful one in *Türk*̈*t*. But after the senile weakness of *Kapaghan Khaghan, Small Kao-kou-li* seceded from him and yieledəd to the Emperor *Haüan-tsung* (玄宗) of T'ang in the 2nd year of *Kai-yüan* (開元 ; 714 A. D.). After the *Knaghan* was killed by his men in 716 A.D., *Small Kao-kou-li* subordinated to T'ang perfectly. But soon after she changed her diplomatic policy to T'ang, as the power of *Bilgä Khaghan* (毘伽可汗) expanded.